

# 飲水思源

嶺北労働者の始まったところ

横田 慧

場所は、根曳峠の少し手前でした。突然、上田博昭さんが悲鳴をあげました、「いかん、エンジンが焼けた、休まんと動かん」と。上田さんは、悔しそうに運転席脇のエンジンの真上辺りを掌でこすりながらスイッチを切りました。乗せてもらっていた川島哲郎さん（高知大教授）と私、上田さんの三人で二百キログラムはあったでしょう。その名もかわいらしいコニーという車が、重荷と上り坂に参ったのでした。三十分ほど休んでから再出発し、目的地の本山公民館へは定刻に到着しました。それは、私たち三人が、嶺北の若者に、経済、哲学を講義するためでした。上田さんは、長距離のしかもカーブつづきの運転のあとでの講義でしたから、私たち二人よりもはるかに大変だったと思います。私なら、あれほどのカーブつづきでは、右車線へのはみ出しもなんのその真っ直ぐ運転するところですが（自動車学校でそうせよと習った）、上田さんは真面目にこまめにハンドルを左右に切りかえました。

どうしてこんな苦勞をする事になったかと言えば、勤評闘争の後、教師、自治体労働者、郵便労働者のような県下の隅々に職場をもつ労働者が、人間の体のなかの血管のように、科学的認識を運び広げることが、世の中を変える確かな道と言われるようになったからです。私などは、多い年には六十三回も講演に出かけました。その甲斐あって、一時は、機関誌読者千数百人、会員百数十人を数える、高知

県労働者学習協会に育ちました。

根曳峠の一件から三十年ほど経って、退職したばかりの私は、久しぶりに嶺北労働大学の講義に立ちました。その講義の後、質問にまじって一人の高齢の女性から、「あの、もう一人の哲学の先生はお元気でしょうか」と尋ねられました。もちろんそれは上田博昭さんのことです。「上田博昭さんは、私より五つ年上ですが、私よりずっと若々しくお元気にしておられます」と答えると、身内の無事を確かめて安堵したように、大きな笑顔を遠慮なく見せてくれました。同時にうなずく年配の人達が少なからずいましたから、かつて上田さんの講義を聴いた方たちがその場にたくさんおられたことが分かりました。その上田さんが八十歳、私は七十五歳になりました。

## 老眼鏡

### 「断捨離」

やましたひでこ著

井上 圭介

元来視力の高かった私は、三十代半ば頃より近くのものは

六甲・摩耶へ

六十年を超す昔のこと、戦争の頃、高知工業から神戸工専へ進学。学徒動員で土山の工場にいれられたが、半年で終戦。秋から焼酎の原で学業再開、山手の寮で自炊生活を始めた。三年足らずで卒業山登りにも足を染めて六十年の月日が過ぎ去っていった。何の因果か関西の山には縁が薄かったが、今回兵庫の山に初見参。六甲山系に登った。

3月17日、須磨浦公園に建つ観光ハウス「花月」に泊まる。格式のある宿で眺望絶景。翌朝、登山開始。先ずは今回の行動計画を述べよう。辿ったコースは世にも名高い「六甲全山縦走コース」であ

が見難くなりました。眼科で診察を受けると、「老眼です」とのご神託をうけました。セカンドオピニオンなどということも一般的でない時代です。市販の目薬などをさしながらがまんしていたのですが、どうにも不自由になりました。ご神託の医師に再度診てもらいました。「無駄な抵抗はやめなさい」との再神託。生まれて初めての眼鏡、これが煩わしい。やがて、遠近両用になつて今に至つてます。

大量に本棚にストックしてある文庫本、退職して時間ができたら読もうと考えていたのです。そんなことはすべて無駄であることに気づいたのは退職二、三年前でした。小さい字の文庫本を読んでいると頭が痛くなる、という現象にみまわれたのです。退職と同時にすべて処分しました。なんのために引越しの度に苦勞しながら大量の本を移動したのか。という時にこの虚しさを解消してくれる本に出会いました。

「断捨離」—究極の片付け術—というサブタイトルがついています。著者はクラタールコンサルタント、やましたひでこ。まず、クラタールコンサルタントとは何。というのが私の気を引いた点です。

ちなみに私は、ほぼ毎日書店を探検します。朝日新聞か

る。神戸市役所の案内パンフによれば、「西から東の宝塚まで50キロにも及ぶ道を歩き通す過酷な山歩きで、毎年11月に大会が開かれる」とある。山系の西端から険しい登りにかかる。標高はたいし

泰泉寺成成日月日記  
坪井幹之

たことはないが、花崗岩の風化で道は痛んでいる。通称「須磨アルプス」と呼ばれる難所を越えて、団地から高取山(320m)に登る。工専時代に寮から仰いだ山である。思つた以上に時間がかかった

ら産経新聞まで、赤旗から自由新報まで目を通すことになっています。ラクターとはがらくたのことだそうで、彼女は「断捨離セミナー」なるものを全国で展開中らしい。とにかく、「捨てよ」の主張です。うーむ、そりやそうだけだなあーと私。それができんのだな、後で役立つこともあるし、第一もつたいたい。しかし、そのもつたいたいと考えることはものを中心に考えているのだ、というくだりにはつとさせられました。

ものから見た価値観でなく、自分にとって価値があるかを判断基準にせよ、と主張する今、自分にとって価値があるのかどうかを基準にせよというのです。つまり、価値基準をものから人にとりかえます。なにやら某政権政党の主張のような気もしますが、まあものがあふれてこまっている方は御一読をすすめます。この本の帯に読者の感想「読んでるそばから、片っ端から捨てたくなる！」(三〇代女性)というのがありました。私がこの本を読み終えるときに捨てたことは言うまでもありません。

(新・片付け術 断捨離  
マガジンハウス 一二〇〇円  
(税別))

ので計画を再考、摩耶方面に先行することにした。電車で三宮へ、続いてバスで摩耶ヶーブル駅へ、続いてヶーブル、ロープウェイと乗り継いでロツジ「オテル・ド・摩耶」に入る。近くに名刹「天上寺」のある山上の楽園、天候の関係もあって、ここに宿をとる。翌日は最終日である。とても予定していた宝塚まで行くことは出来ないので、せめて六甲の「記念碑台」までと縦走路を辿った。ルートはバス路線を追って、途中、六甲山牧場などを経て記念碑着、後年観光開発の拠点となった台地を訪れ、ヶーブルで下山。三宮の新神戸駅で解散。新幹線と南風で帰高。

テニスを楽しむ旅

梶原 詳三

尾道市にある「広島県立びんごテニス場」で、びんご遊悠テニスクラブと高知シニアテニスクラブの親善交流大会が、去る四月十九日〜二十日一泊二日で行われました。高知県からは、私の所属するフライデークラブ十四名を筆頭に、十のクラブから総勢四三名(男二十四名、女十九名)が参加し、両方総勢百名。

試合方法は男子ダブルス、女子ダブルス、ミックスダブルスの三種目をペアーを変えながら一人六試合をびんご・高知の対抗戦で戦うものです。従来は、男子は「びんご」、女子は「高知」が強く、この十年間はやや高知有利の状況でしたが、ここ二年「びんご」が五十代の若手(シニアでは若い)が加入するなどの

女子の強化で分が悪くなっています。

高知は七十七歳を始め、七十台十九人、六十台二十三人、最も若い人が五十九歳。先方も似たような構成です。一年交代で広島・高知を行き来して、今年びんごの当番。

貸しきりバスで朝八時に高知を出て、十二時に現地に着くと、通路に全員が並んでの歓迎に感激。テントも二張り、その中には女性陣手作りの何種類ものケーキ、はちみつレモン、各種の飲み物、正味の抹茶のサービス、文旦、オレンジ、バナナなどの幾種類もの果物など、心のこもったお接待に一同感謝です。試合の合間には接待を受けて元気を付けて試合です。あらかじめレベルを合わせて組みますので、白熱して何とも言えず爽快です。負けても勝つて充実感一杯で、試合経験の少ない妻も、三回目の参加で

友人がたくさんできて、来年岡山で行われる夫婦ミックスに出たいと張り切っています。妻は二勝三敗二引き分け、私は五勝一敗、二日間のトータルは高知五勝六三敗で二連敗でした。

宿舎は尾道の奥座敷天然温泉「尾道ふれあいの里」、お湯はほほえみの湯八種類、ふれあいの湯六種類計十四浴槽で西日本一を誇っていました。露天風呂も情緒がありました。宴会も、高知の河内音頭の歌と踊り、南国土佐を後にしての大合唱、びんごはひよつとこ踊りやフラダンスなど、大いに盛り上がり、二次会も十畳に三十人くらいの参加で夜遅くまで交流を深めました。帰りは、しまなみ海道を通り、今治を経て高知に帰りましたが、みやげに頂いた酒を飲みながら、因島・生口島・大三島・伯方島など六島と新尾道大橋・因島大橋・来島海

西から東から 最新版江戸の花見

是澤 守義

昨年の退職旅行は奈良吉野の桜を堪能して、生活チャネルの切り替えをしました。今年の桜はどこにする？妻と情報誌やインターネットで情報収集をといふ矢先、東京に行く用事ができ、急遽二人で、江戸の花見としゃれこむことになりました。東京桜開花状況をチェックしながら、列車で上京。今年の春の寒暖の差は、こうせつつうたの歌詞ではありませんが、着てゆくものが決まらないうまま、そこそこのものを鞆に詰めて東京へ。早々に用事を片付けて、まずは今話題の「スカイツリー」見学に押上へ、エレベーターで地上に出るとそこが見学スポットでした。記念写真の後浅草へ、吾妻橋から見る隅田川べり満開の桜とスカイツリーのツーショットは、季節限定だけに贅沢なものでした。その後、合羽橋道具街へ。ありとあらゆるものがそろったこの街は、新発見の連続でもあります。ここでもスカイツリーが堂々とした姿

を見せられました。完成が楽しみです。

翌日は、定番の皇居・千鳥が淵へ、歩くにはかなりあるなと思っていると、目の前を屋根のないバスが通り過ぎていきました。これも最近人気の「スカイバス」乗車場所もすぐそこということがわかって、さっそく「皇居・銀座」コースに、大勢の花見見物の人たちの注目の視線をそここに感じながら、ガイドさんの案内で、満開の桜のトンネルや、花吹雪をうけながらゆつくりとまわっていきます。約1時間の至極の時でした。次の日は、新宿御苑に、「アルコール類の持ち込みはご遠慮ください。」という声を聞きながら入場、家族連れの多いのんびりとした雰囲気、ゆつくりとした時間、間が流れます。ここも、広大な庭のそここいろいろな桜が満開でした。ちなみに、花の下でお花見の団体さんは、すっかりビールも楽しんでいました。東京は、古都奈良や京都とは趣の違った桜の名所が目白押しで、昨年同様満喫することができましたが、

行く前の心配通り寒い寒い、特に屋根のないスカイバスが高層ビル群を通過する時は、太陽のひかりもささず本当に寒かったです。

山の会よりのお知らせ

参勤交代の道と坂本龍馬先祖の墓訪問

山の会は、6月例会として下記の日程で、表記の山行きを行います。参勤交代の道は、野島辰平さんたち瓶岩地区活性化活動団体が、領石から立川御殿へと続く山道の南国市側を平成17年より整備されている道で、当日は野島さんの案内で行きます。南国市瓶岩と登山口から権岩峠(標高550m)まで片道約2、3キロ・登りの連続で中程度の山登りです。距離は短い恒例の初歩きより少しハードな行程です。山道を歩く前に、南国市才谷にある坂本龍馬先祖の墓にも車で立ち寄ります。また、この山行きは、浜田昌俊さんの90歳記念登山も兼ねており、下山後(3時頃?) 浜田さんを囲んで茶話会も行います。

記

日時 6月6日(日) 8:30~ 予備日 6月8日(火)  
集合場所 道の駅南国駐車場(上の段) 8:30 (下は混雑するので)  
参加費 500円(写真代等)  
参加申込 上岡 積 (Tel 088-803-7681)  
土居 正明 (Tel 088-844-2444)



映大橋など七橋の絶景を楽しみながら満ち足りた気持ちに浸りました。中でも全員が初めてという大島にある「亀老山展望公園」は、北に生口島や大三島・伯方島を望み、南には来島海峡大橋の全貌を眼下に見て見応えがあり隠れた名所でした。また道の駅「よしうみいきいき館」では下から大橋を眺め、上下から来島大橋を見ることができ、「来た甲斐があった」と紹介していた「びんご」の友人に感謝しました。旅の報告とはかけ離れましたが、テニスやスポーツは健康のためにも生き生きとした生活のためにもいいものです。いい汗をかきませんか?